

## 28 スイカ

### 地域慣行基準

#### 【化学肥料】

区 分	窒素成分量 【kg/10a】	備 考
県下全域	10	

※前年秋に有機物の腐熟促進のため、石灰窒素などの窒素を含有する肥料を施用した場合は、窒素成分で4kg/10aを上限に、施用した窒素成分を地域慣行基準に加えるものとする。

#### (1) 特徴と吸収特性

スイカの養分吸収量は果実と茎葉でパターンが異なり、果実では窒素、リン酸、カリが、茎葉ではカルシウムの吸収量が多い。**養分吸収量は定植から開花・交配期までは緩やか**であるが、**着果期以降急激に増加**し、全吸収量の約7割を着果期以降に吸収する。窒素は生育初期にはつる数を確保するために必要だが、**着果初期及び雌花開花期に肥効が強いと栄養生長過多でつるのぼけとなり着果不良となる**ため、生育初期の窒素施肥は慎重に行う。養分吸収量は果実肥大期に最も増加し、十分な葉数と葉面積を確保し、果実の発育を助けるために窒素とカリの肥効を高める必要がある。ただし、**果実成熟期に肥効が強いと果形の乱れ、裂果、糖度不足などの悪影響**がでるため、**肥切れを起こさない程度の肥効**がよい。

台木の種類によっても養分吸収特性が異なる。想定収量を10a当たり6,000kgとした場合、窒素吸収量は10a当たり18kg、リン酸4kg、カリ19kg、石灰12kg、苦土4kg程度と考えられる。

表 スイカ 目標収量と養分吸収量（神奈川県農総研）

目標収量 (kg/10a)	部位	養分吸収量 (kg/10a)				
		窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土
6,000	果実	12.9	3.5	16	1.9	1.8
	茎葉	4.8	0.8	3.3	10	1.7
	合計	17.7	4.3	19.3	11.9	3.5

スイカは栄養生長である茎葉の生育と、生殖生長である果実の肥大との均衡をとりながら収量を確保する必要がある。施肥量は土壌や前作によっても異なるが、一般的には**10a当たり成分量で窒素10~15kg、リン酸20~25kg、カリ10~15kgが標準**となる。施肥割合は、**リン酸の全量と窒素、カリの半量を基肥とし、残りを追肥**として施肥する。施肥には緩効性窒素肥料や、被覆肥料に鶏糞ふんや油粕などの有機質肥料を合わせて用いる場合が多い。緩効性肥料を用いる場合には基肥の施肥割合を若干高くしてもよい。

追肥は生育の状態、着果の状態を見ながら時期・量を決めるが、マルチ栽培では追肥がしにくいいため、**緩効性肥料の利用の増加**も相まって追肥回数や量は減る傾向にある。追肥時期の目安はつるが15~20cmに伸びたとき、つるの長さが50~60cmに伸びたとき、一番果が鶏卵大になったとき（ただし、着果が遅れてつるが伸び過

ぎているときは窒素を控える)、一番花の直径が 20cm 程度になったときである。

なお、つるぼけを防ぎ、目標とする節位にしっかりと着果させるために、必要以上に施肥量が増えないように注意する。特に、窒素施用量は着果や果実肥大に大きな影響を及ぼすので、**土壌診断に基づき適正量を施用**する。また、土壌消毒を実施した場合には、土壌からの窒素供給量が増えることを考慮して、基肥の窒素を 2 割程度減肥する必要がある。